

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(基礎編)

第4回：子どもの性格は親がモデル？

今回の講義はお聞き苦しかったことかと思えます。遠路の支援活動に行ったからというのは理由にならず、体調管理の不手際はプロとしては恥ずかしい限りです。お詫びいたします。

さて、今回のテーマについて、結論から言いますと「基本的には、そうです」というのが答えです。「基本的に？ 基本的になの？」そうです、基本的にです。

E.H.エリクソンは心理社会的発達理論の中で、乳児期から老年期までの8つの発達段階でクリアしなければならないそれぞれの発達課題が挙げていますが、1つひとつの課題を確実にクリアしなければ次の発達段階や課題に進むことは出来ないというものではありません。

ただ、1つ目の発達段階である乳児期にクリアしなければならないおける「基本的信頼感」という課題は、残る7つの課題を達成するためには必ずクリアしなければならない課題なんです。それは社会性を高める上で非常に重要な課題だからで、この課題をクリア出来ない場合には他者に対して信頼を置くことが出来ないため、いろいろな人と関わることが出来なくなるのです。それでも、その課題さえクリアすれば、親子関係による1層だけの“性格”は出来上がりはしますね。

(育児放棄や虐待するなど、子どもの立場に立って育児、養育しようとしなない親からは、子どもは人に対する基本的信頼感すらも得ることは出来ません)

でも、厄介なことに、大きくなるにしたがって義務教育の場面に入っていかなければなりません。否応なしにです。しかも、そこには実にさまざまな人たちやグループが居ますし、さらにはすべての人やグループが異なった性格・価値観、考え方、集団規範(集団としてまとまるために暗黙裡に作り上げられたグループ特有のルール)を有しているわけです。

実は、人は、さまざまな人やグループと変わり、その関わりを通して得たさまざまな経験により人間性を高めたり知識を知恵へと進化させたりすることが出来るものですが、そのいろいろな経験をする機会を持つことが出来ないということは、非常に偏った人格が形成されたり、非常に脆弱(壁にぶち当たると立ちすくんでしまい、何とかして壁の全部あるいは一部を切り)崩す方法を考えることも、違う道を探して前に進もうともせず、クルリと後ろ向きになってその場から立ち去ったり、遠くからそれらしいものの存在を確認した時点であっさり引き下がってしまうなど)な精神を築き上げてしまいかねません。つまり、嫌なことから目を背け、“耐える”こともせず、“工夫して乗り越えよう”ともせず、もちろん傷つくかもしれないことに取り組むなんて滅相もないといった、“ひ弱”な人になってしまいます。皆さんは、このようなひ弱な人がこの非常に厳しい現代社会を、曲がりなりにであっても生き抜くことが出来ると思われるでしょうか？

このように、子どもの性格は必ずしも親がモデルとまでは言い切れないものの、親(保護者)との関わりから信頼感を得た上でいろいろな人たちと関わり、経験をするを通じて第2、第3層へと積みあがり、多層から成る一つの“性格”、しかも柔軟性のある性格が形成されるのです。

ちなみに、皆さんは、お子さんに対して、どのような大人になって欲しいと思っておられますか？「人に迷惑を掛けない人になって欲しい」という願いがあったとすれば、人って誰？迷惑ってどんなこと？どんな場合でも迷惑をかけてはいけない？欲しいということは、時と場合によっては迷惑をかけてでも自分を守ることも有りということ？

では、もう一つ尋ねます。皆さんは、このような大人になって欲しいと子どもに願うような大人になることが出来るように、皆さんは子どもと日々、関わっておられますでしょうか？

曖昧模糊な表現で願いや思いを持っていては、その場その場の行き当たりばったりで子どもと接してしまい、知らず知らずの内に親が子どもの足を引っ張ってしまって、そもそも抱いていた願いとはかけ離れた大人になってしまったなんてことが、現実には往々にしてあります。

是非、親が子どもに願っていること、望んでいることをもう一度振り返ってみて、その言葉一つひとつを具体的かつ正確・明確に規定してみられては如何でしょうか？必ずやわが子を育てる上で具体的で明確なガイドラインとなるはずですから。